



その想い



第7号

発行人：谷泰智
29年3月1日発行

★ 仏教青年会の托鉢に参加してきました



昨年暮れの12月7日、高知県仏教青年会の托鉢に初参加させていただきました。

本山修験宗の托鉢においての正装は、鈴懸と呼ばれる山伏装束です。ですから画像でもお分かりのように、私ただ一人が異常に目立ってしまいました。(笑) この日はテレビカメラも取材に来てくれており、夕方のニュースで取り上げられ、私も大きく写っていたそうです。

以前から高知県仏教会には所属していたのですが、青年会にはこの托鉢行事を通して、新たに加えていただきました。様々な宗派の副住職さんなど、比較的若手の僧侶の方々とお近づきになれて、一層御縁が広がりました。今後も横のつながりを広げ、現代に歩み寄った仏教を模索していきます。

5月8日(月)午後2時から、県民文化ホール(グリーン)にて『現代人のための仏教』と題された講演会が僧侶の釈徹宗師をお招きして開かれます。入場無料ですので是非！

★ 『般若心経解説』は好評をいただきました

何の色気もない、ただ般若心経の中身について解説するという行事を1月28日の護摩の日に行いました。

お四国参りをきっかけに、般若心経を暗記してしまったという方も少なくないと思いますが、その反面、どんな内容なのかについては未だ多くの方に知られておりません。そこで今回、自作の資料3枚を用いながら、普段お経にご縁のない方でも、僅か90分足らずで、般若心経の内容が解ってしまうという行事を企画実行しました。

もし、般若心経に興味がお有りの方がいらっしゃいましたら、お気軽に護国寺迄お問い合わせ下さい。どなたでも無料で資料をお渡しします。

ケンチャヒガシエ

★ 是非、献茶彼岸会にお越しください

去年大変好評を頂きました献茶彼岸会を、今年も3月20日の月曜祝日（10時と2時）に開催いたします。

故人様のお位牌あるいはお写真、そしてできればお茶碗を持参いただけだと有難いです。堅苦しさの全く無い、和気あいあいとした彼岸会です。(^^)



去年の様子



★ お彼岸のこと（後編）※第五号の前編の続きです。

まずは、阿弥陀如来という仏様が治めているのが西方極楽浄土であり、西方とは字の通り西の遙か彼方であるという点を踏まえて下さい。そしてそこに、春分秋分の両日は、太陽がほぼ真西に沈むという事実を重ねて、頭の中でイメージしてみて下さい。

つまり、真西に太陽が沈む時、思わず足を止めてしまうあの美しい夕焼けの向こうに、大昔の日本人は極楽浄土を見出したのです。確かに、夕焼けは美しいですが、どこか胸を締め付けられるような哀愁を感じずにはいられません。その哀愁とは単に、夜が訪れる事を厭う人間の生物としての本能からのものでしょうか？ 否、夕焼けの光は阿弥陀の光明となり、我々の内に秘められた仮性を照らしているのではないでしょうか？ そうして仮性が開かれた時、我々は大切な亡き人達を想い、『繋がりたい』と願います。穏やかな季節に穏やかな心で、どうか故人様にお参り下さい。

※経典をお求めの方はお気軽に護国寺までお電話ください。

1200円程度でお買い求めいただけます。

読み下しの般若心経も収録されています。

★回りて向かう～仏壇について その四～



今回は御仏壇の一番上中央に祀られている仏様、阿弥陀如来についてお話しします。

「そんなことしたら式が台無しになるで！」、なんて言葉を一度は耳にしたことがおありかと思います。実は、台無しの台は阿弥陀如来などの仏像が乗っている蓮の葉でできた『蓮台』に由来しています。つまり、この蓮の台がない仏像はその威光が損なわれているとの意味が元となり、そこから転じて、ある物事が見事には成立しないという意味で、台無しという言葉が生まれました。

その蓮を仏教では一つの象徴的な意味で捉えます。それは、誰もが泥の中のような濁った俗世に在りながらも、可憐で美しい花を咲かすことができるとする、仏教の理想としての意味合いを表します。

阿弥陀如来とは、その理想の『悟り』とも呼べる花を見事に咲かせ、以後は無量の光を放ちながら極楽浄土からあらゆる世界を照らし、極楽へ赴こうとする一切の衆生を安らげく守りつづけている仏様です。

そもそも如来とは悟りを体現した存在のことです。また、如来の前の段階を菩薩と呼びます。菩薩とは悟りを求めて修行に励み、尚且つ人々を救済するために世間の中に生きる存在のことです。

という訳で、実は阿弥陀如来もかつては法藏ホウゾウという名の菩薩だったのです。法藏菩薩は四十八にものぼる誓願セイガンを立て、それが全て達成されるまでは決して修行を止めませんでした。結果、阿弥陀如来になるまでには人間の理解を超えた時間が流れました。

四十八の誓願の中でも、『阿弥陀如来を信じ念佛を行うものは、すべて必ず往生させる』という内容の十八番が特に重要視されるようになり、ここから我々が特技を披露する際に使われる

十八番（おはこ）という言葉も生まれました。このように少し調べてみると、現代人が普段よく使っている言葉の中には仏教から生まれたものがたくさんあるのです。

さて、そんな慈悲に溢れた阿弥陀如来は、様々な姿かたちで表現されています。右上は立像、左は座像です。まず後背の違いがあり、いわゆる後光の射し方にもいろいろあります。皆様の御仏壇の阿弥陀様の多くは、おそらく舟をかたどった後背になっているかと思われます。

この舟に多くの人を乗せて、彼岸まで、さらには極楽浄土まで我々を導いて下さると言われています。さらには縵網相と呼ばれる水かきで、舟に乗ることができない人々まですくい上げて下さるとも言われています。

特に覚えておいていただきたいのが、右上の立像の両手のポーズです。『施無畏与願の印』といい、解り易く言えば、「大丈夫だよ、あなたをちゃんと見てるよ！」と我々の恐れを無くしてくれるのが右手の施無畏印。左手は掌を

こちらに向けて指を垂らし、まるで、「手を貸そうか？」と我々の願いを成就させる為の力を与えて下さる与願印です。

左の座像の両手は『弥陀の定印』といい、極楽浄土へ全ての衆生をいざなおうとする瞑想の状態を表し、両足も結跏趺坐ケツカブザという坐禅を修する時の組み方になっています。

どうでしょうか。ここでは紹介しきれませんが、仏像の姿には様々な教えや願いが込められています。ここで述べました、ほんの少しの知識を胸に留め、御仏壇の阿弥陀如来に向かっていただくのと、そうでないのとでは、やはり気持ちの入りようも違ってくるものと思われます。

次号では、その阿弥陀如来と一つになる時の悦びをたった六字で表した御念佛『ナムアミダブツ』について、じっくりお話ししたいと思います。



★檀家さんに聞く



お話を伺った社長の
北添幸道さん。

日高村岩目地にある北添製材。この製材所の前を毎日通勤される檀家様も多いことでしょう。

しかし、この北添製材で加工された木材が世界遺産の修復に使用されていることは、まだまだ地元の人にも知られていません。

普段、我々が当たり前に、その前を通っている地元企業の北添製材。素通りするだけでは気づかなかつた意外な事実や驚きは、少しの勇気を出して、お話を伺うことで得られました。



画像の中の赤丸で囲んだ部分が、北添製材が納入されたケヤキ。舞台の下で、古材と接合されています。

坊 ちょうど一昨年亡くなられたお父様から数えて、幸道(こうどう)さんで2代目になられますか？

北 そう、この製材所は親父が始めたがやけど、昔は電化製品を梱包する枠材を主に作りよったがよ。当時の早川電機、今のシャープの下請けでね。

そしたら、向こうは製品が新しくなるたんびに寸法を変えてくるのよ一方的にね。自分はまだ20代前半やったけど、いつまでも振り回されよったらいかんと思うて、たいてい親父とも喧嘩したけど、建築材のほうに転換したがよ。お陰様で、今は多くの社寺仏閣の修復と建て替えに関わらせてもらひゆう。

坊 北添製材は特殊な材を扱うということは以前から聞いていましたが、やはりケヤキが多いですか？

北 昔は確かにケヤキでだいぶ潤うた。(笑) けど、今は社寺仏閣しか需要がないきねえ。個人の家でケヤキを使う人も、もうほとんどおらんなった。

文化財の修復もたいていやらしてもろうたけど、文化財は決まりがあって、まだ使える材はそのまま使わないかんがよ。やき、分解して詳しく材を調べたら、最初の見積もりと全然違ってきて、うちが原木を挽いて納入を待ちよっても結局そんなに使わんで修復が終わるっていうこともあるきね。(笑)



坊 やっぱり、大きな材になると何年も乾燥させて寝かしちょかないかんがでしょ？

北 いや、それが一概にそうでもないねえ。

それこそ以前、出雲大社のでっかい破風板の修復があったのよ。石川県の工務店が請け負って、うちも材を納入することになって、ここへ取りに来てくれたのよ。ところが、うちは事前に原木を挽いてちゃんと構えちよったのに、たまたま傍らにあった丸太を見て、「いや、この木のヒガミが良いわ！こっちを挽いてくれ！」なんて言われて。もうその日は4時回っちょたき、先方には近くで泊まってもらって、明くる日に急いで挽いたなんてこともある。(笑)



それとか、こないだ松山のあるお寺に入った確かこれも破風板にする材やったと思うけど、それは1.2mあったのを生木で取っていったで。(笑)

坊 よく大きなトラックが出入りされてますが、修復や建築の現場まで材を届けることもあるんですか？

北 稀に、修復のお寺さんまで直接届けたこともあるけど、大概は工務店が取りに来たり、こっちが中間地点の市場まで運んだり、だからここで加工した材が最終的にどこに使われちゅうか全部は把握できてないがよ。

修復が終わってから、その関係者の人が写真を送ってくれたり、感謝状を頂いたりして教えてもらうこともあるし。

それこそ、そこに飾っちゃうのが京都の清水寺の舞台の修復の写真やけど、舞台の人が乗る板を支える材を納入させてもらった。全部ケヤキ。遠目に見たら小さいけど、太さが75cmやきでっかいで！

～今までの主な納入先～
観光の際には是非思い出してください

伊勢神宮の高欄

箱根の関所の京都側

23番薬王寺の仁王門

85番八栗寺の本堂

須崎の大善寺の鐘楼堂



お経のことば

すでに過去に於いて極楽浄土に生まれたいと願い、
或いは今願い、或いは未来に於いて願うなら、(中略)
すでに過去に生まれており、或いは今生まれ、或い
は未来に生まれることであろう。

仏説阿弥陀經
訳 木内堯央

アミターバ（無量の光）またはアミターユス（無量の寿命）、それに漢字の音読みを当てはめたのが阿弥陀です。如来とは字の通り、『来るの如くの存在』または『そのように行きし存在』という意味になり、如来=悟りを体現した存在=ブッダ=仏、と解釈できます。

つまり、阿弥陀如来とは無量光の仏、または無量寿の仏であると言えます。今回のお経の言葉はその阿弥陀如来が治める国土『極楽浄土』についてお釈迦様が説かれた、仏説阿弥陀經をご紹介します。

実は、我が本山修験宗では、主に葬儀や年忌法要の際にこのお経を唱えます。実際私も葬儀の読経は必ず阿弥陀經と決めています。では、いったい何が説かれているのでしょうか？

それはズバリ、「極楽浄土は大変に素晴らしい！」とにかくそこへ至れるよう、一心不乱に阿弥陀仏を念じなさい！」ということがひたすらに説かれるお経です。お経の出だしには、平家物語の冒頭に登場する祇園精舎にて1250人もの修行者や信者を前にし、お釈迦様が説法を始められたとあります。

説法は続き、西方の遙か彼方に、一切の苦しみが無くただ楽しみだけを受ける極楽という浄土（仏が治める国土）があり、そこには七宝の池があり青黄赤白の可憐な蓮華が咲き、また黄金の大地には曼荼羅華（一説にはチョウセンアサガオ）の雨が降り、美しい鳥たちが飛び交い、そよ風はその風景の中を通過すると壮大なオーケストラの演奏を奏で、その音を聞いて誰もが仏・法・僧の三宝を敬う気持ちを絶えず興す、という正に風光絶佳の壯麗なイマジネーションが展開されます。

さて、その極楽浄土の主である阿弥陀仏への信仰を特に深めていくのが浄土教であり、日本では主に平安時代末期から鎌倉時代にかけてのいわゆる末法思想の中で、あの世への希望という形で民衆に支持されたというのが、現代の世間一般的な解釈のようです。

ところが、浄土教とは、単に現世を諦めてあの世での救済をひたすらに願う教えだけでは全くありません。上に紹介しましたお経の言葉の通り、むしろ、今あなたがいるその場所その時に阿弥陀仏を念ぜよという、大胆に飛躍して言うと、大慈悲心からの『自己肯定の教え』なのです。

阿弥陀經を敢えて現代的に読み解くならば、昨今、医療やスポーツさらには教育現場にも広く取り入れられているコーチング理論を用いると解り易いです。コーチングとは、それぞれの状況に応じて人間の可能性を最大限に引き出してあげる認知科学的な方法論と実践のことですが、一見荒唐無稽と思われる阿弥陀經の内容も、コーチング的な読み解きをすることでかなり実感を持てると思います。

過去・現在・未来を問わず、『そう願うからこそ在るので』という自己肯定の発露こそが念仏であり、それを極めつくしている時、人は極楽にいるのです。

次回の行事お知らせ

● 3月20日（月祝日） 第二回献茶彼岸会

午前10時と午後2時（各自お位牌とお茶碗をお持ちください）

● 4月22日（土曜日） 奉音供養会

詳細はお電話にて
お問い合わせ下さい。

午後6時半から、本堂にて久乗おりんのコンサートを開きます。

● 每月28日 柱源護摩供

柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回、参加費等無料です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。

護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

0889-24-7244

ホームページ gokokuji.site

仏事に関するお悩み、ご質問、
行事に関するお問い合わせ等、
お気軽にお電話ください。

